

私の将来の夢

富士見小学校 6 年 齋藤 奏果

私は、将来医療関係の仕事につきたいと思っています。今一番なりたいのは、医者です。私は、双子で生まれた時に、1864グラムの未じゅく児で、心ぞうに穴があいていたそうです。このままだと他の子と同じように運動などができないと言われ、母と父は、すごくなやんだそうです。その時、お医者さんとかん護しさんは、さまざまな治りょうをしてくださり、一年後には、心ぞうの穴がふさがりました。私は、そのことを聞き、おん返しをしたいという気持ちになり、医者になりたいと思うようになりました。また、私は、小さなころ、よく熱やぜん息の発作が起き、病院に行っていました。症状がひどいときには、一本に何時間もかけて、点てきをしていました。そのときに、お医者さんとかん護しさんに「大じょうぶ？つらいね。えらいね。がんばっているね。」と声をかけてもらい、つらかったことを忘れてしまうくらいうれしかったです。私は、そのお医者さんとかん護しさんのことをかっこいいと思い医者にあこがれをもつようになりました。

また、夜に脱水症状を起こした時、狭山市には、子どもを受け入れてくれる病院がなく、母は、川越市の病院まで行かなければ治療を受けられなかったそうです。行く途中は、不安と心配で頭がいっぱいになったそうです。そして、夜間でも子どもを診てくれる病院が近くにあったらなあと思ったそうです。現在狭山市には、小学生6912名、中学生3524名、その他に多くの乳幼児がいます。また、狭山市では、子ども医療費支給制度が進んでいます。ですが、子どもが深夜や休日に急に熱を出したりすると、受け入れてくれる病院が多くはありません。

私が、昨年十二月に検査入院をしたときに、狭山市では、子どもを検査してくれる病院がなく、毛呂山町にある、子どもを検査してくれる入院設備が整った病院まで行き、入院することになりました。このとき、私が通っていた病院のお医者さんは、様々な病院をさがし、受け入れ先を見つけてくれました。そして、母は、私のことを心配する気持ちと、朝早くから、夜遅くまで一人にしてしまう姉のことを心配する気持ちが混じり合っていたそうです。私は、母がつきそいに来る時間が少しおそくなると連絡が来たとき、急に不安になりました。小学校高学年の私でも不安になったので、小さな子は、私よりも、もっと不安が大きいと思いました。また、小学生以下の兄弟、姉妹がいるお母さんは、家に残っている子の心配もしなければいけないので、家から一番近い所に、子どもが入院できる病院があると良いと思います。

このことから、狭山市にも、子どもが入院も、検査も、手術もできる病院ができるとよいと思います。

私はそんな病院ができたなら、そこの病院で働いてみたいです。でも医者になるのは、そう簡単ではありません。医学について、専門的な学習をしなくてははいけませんし、患者さんの心によりそい合える、やさしい気持ちを持たないといけません。そのために私は、今、い

っしょうけんめい勉強し、人とコミュニケーションを取ることを頑張っています。

そして、これから、中学校、高校、大学と進んでいく中では、すばやい判断力と切りかえを早くすることを頑張りたいです。また、相手の立場に立って、人の気持ちを考えてあげられるように努力したいです。

私は、今まで、さまざまな人達に病気だけでなく、心もいやされてきました。私は、その人達のように、病気だけでなく、心も元気にできるようなお医者さんになりたいです。